

萩

Vol. 18

ものがたり

旅する民俗学者

宮本常一
が見た萩

萩ものがたり編集部



H
I
II

発行所

萩 氏寄贈

シリーズ

萩

ものがたり

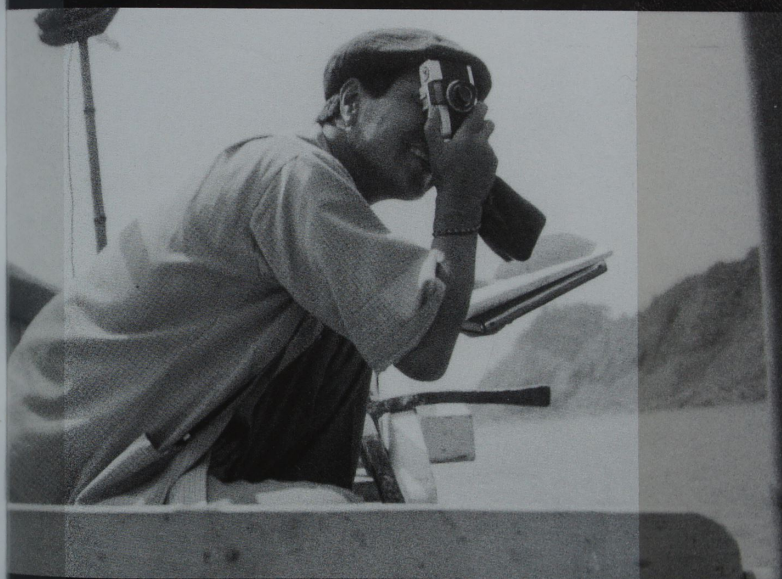
18

旅する民俗学者

宮本常一が見た萩

宮本常一が見た萩

萩の町を歩く



▲昭和36年9月、オリンパスペンを構える見島調査時の宮本常一（萩博物館蔵）

旅する民俗学者

宮本常一が見た萩

生涯のうち約四千日を旅に過ごし、「歩く巨人」とも称された民俗学の巨星・宮本常一（みやもとつねいち）。日本中の村や島々を歩き続け、その行程は約十六万キロ、地球四周分に相当するという。現地調査には必ずカメラを携行し、メモをとるような感覚であらゆる事象にレンズを向けた。その枚数は生涯で十万点にも達した。宮本が撮影した写真は、何の変哲もない普通の庶民の暮らしの様子。

フラッシュもたかず、三脚もつかわず、自分で現像するのでもなく、いわゆる写真をとるたのしみというようなものも持っていない。忘れてはいけないというものをとっただけである。（中略）ここにかかげる写真はつまらぬものが多い。家をとったり、山の杉林をとったり、田や畑をとったり。しかし私にはそれが面白いのである。そこには人間のいとなみがある。他の人が何でもなくつまらないと思うものに、私はひどく心をひかれたり感動したり、また考えさせられたのである。（私の日本地図①天竜川にそって）

確かに、宮本の写真は何の変哲もない普段の町の佇まいや、庶民の生活風景、生活や生業に使用された道具などがモチーフとなっている。さっと見ると何の印象も残らない写真たちである。ただ、そこにはファインダーを通して宮本の深く温かいまなざしが込められている。それを読み取るには、写真を見る者の知識や洞察力、そしてさらに、心のなかの慈しみや優しさの量が問われるのだと思う。

宮本の外祖父は大工で萩にも稼ぎに出ていた。母親も若い頃、子守奉公した山口市の士族の墓参で度々萩を訪れていた。外祖父から、そして母親から、宮本は萩の町のごまごまとした様子まで聞いていたようで、宮本にとって萩の町は特別の存在であったようだ。その萩に初めて訪れた年月をどうしても思い出せないという。この時は母や外祖父から聞いた萩の姿を確かめるため、一心に歩いたようだ。普段の宮本であればそのあたりにいる人をつかまえてあれこれと話を聞くのが常であったが、この時は誰にも声を掛けることがなかった。それは自分にとって異常なことだった、と記している。

宮本がはつきりと萩を見ることができたのは昭和三十五年の夏だった。昭和三十五年から三十七年、さらに昭和四十三年・四十四年、民俗調査のために宮本は萩を訪れている。調査対象地となった萩沖見島や、ダムに沈む阿武川流域の山村を中心に、昭和三十年代から四十年代の萩の様子を二枚余の写真に収めた。その撮影枚数は、宮本の郷里である周防大島町に次ぐボリュームであるという。

このブックレットでは、その膨大な写真の中から代表的なカットを選び、宮本常一の眼差しを通して見た、当時の町の様子や人々の暮らしの模様を収録。さらに、「私の日本地図⑩・萩付近」（同友館 昭和四十九年五月二十五日発行 絶版）を中心に、宮本常一の残した多くの著作より萩に関する記述を抽出し、現在の様子などを加味して、写真が撮影された背景を補足する構成とした。

旅する民俗学者 宮本常一が見た萩 目次

■写真提供/周防大島文化交流センター

日本一の城下町 20



鶴江浦 18



住吉祭礼の前日 16



古い町の面影 14



映画館前の自転車 12



萩の魚市場 10



萩かまぼこ 8



壺場川 6



ジコンボウ 38



宇津海岸の石垣 32



中村清次郎翁 22



浦方と地方 30



船着き場 26



トキワスキ 28



見島丸 24



菊ヶ浜 22



六島村の中心 大島 36



この島にも共同負債 瓶島 34



災害復旧工事の負担 尾島 48



オイコ談義 相島 46



里子の島 羽島 44



島のこども 42



二段の池 40



墓の城 38



佐々並から藤蔵へ 50



日本一美しい村 佐々連 52



阿武川の流域 54



【注】①本文中でゴシックの部分は、宮本の著作からの引用を示す。底本とした「私の日本地図13：萩付近」（同友館 昭和49年5月25日発行 絶版）については、その表示を省略し、それ以外の引用文献については、その書名を表示した。
 ②掲載した写真については、周防大島文化交流センターにご協力を頂き、収蔵されたデータベースより使用させて頂いた。なお、同データベースはインターネット上に公開されており、宮本が残した膨大な数の写真を閲覧することができる。URLは右記の通り。http://www.towatown.jp/database/
 ③写真のキャプションは、主に「私の日本地図13：萩付近」で表記されたものを流用し、撮影日も併記した。
 ④見島については、学術調査対象地であったため、宮本の残した写真・記述ともに相当量にのぼる。「私の日本地図13：萩付近」だけでなく、「著作集⑤ 日本の離島」では見島の共同負債について、また「著作集⑦ 宝島民俗誌・見島の漁村」では、見島の漁業集落について、詳細な調査記録が収録されている。今回のブックレットでは、その誌面ボリュームの関係、および、同シリーズ内で「萩沖の島々」が今後発行予定のため、見島に関する写真・記述について、かなりの部分を割愛することとした。

藍場川



▲藍場川と川船（昭和36.9.7）



▲藍場川から邸内への水の取り入れ口（昭和36.9.7）

昭和三十六年九月に萩の町を歩いた際、宮本は藍場川あいのがわの写真を数多く撮影している。著作の中に藍場川の記述を見つけることができなかったが、荷物輸送用の運河として、洗濯物や野菜の洗い場として、そして生活用水を家屋内に取り込む水源として、川沿いの住民たちが多目的に利用してきた様子が、宮本の心を惹き付けたことは想像に難くない。またこの藍場川の水を邸内に引き込み、築庭した武家屋敷群（桂太郎旧宅等）にも目を向けている。

川船は姿を消したものの、この写真を見ると、現在の藍場川もそれほど変容はしていない。通常の町であれば、都市開発の名のもと、利便向上のための道路拡張などで、川は暗渠あんきょにされたり、川自体を埋めてしまうということが全国各地でなされてきた。現状、川があるため、確かに普通車での通行が厳しい道幅となっているが、生活利便を犠牲にしても、先人の築いた生活遺産と、川べりの景観を残そうとした市民の強い意思を宮本も感じたのではないかと思う。

下の写真、手前の石段をハトバと呼び、洗い物をするときの足場とした。また邸内への取水口が中央左より写っている。邸内は畳半分程度の大きさの水槽になっており、果物を冷やしたり、食器を洗ったりするときに使用、その残滓ざんじを餌にする小魚が住み着いていた。

残滓を餌にする小魚

萩かまぼこ



▲カマボコを焼く（昭和35. 8. 1）

浜崎の町を歩いた宮本は、通りに面した店先で蒲鉾を焼く若者に出会う。

板カマボコを焼いている店があつて、声をかけてみたら東京の三越に送っているのだという。このカマボコは味の上では日本一だという。「まあたべてみなさい」といって二本くれた。くれた若者と話しながらたべる。確かにうまい。「これは名物になる」といったら、ならぬと答える。昔は名物であつた。名物というのは欲しい人の手にゆきわたるほどなければならぬ。昔はたくさん作つて、萩の焼カマボコといえはその名を知られた。今は材料がなくてチョッピリしか作れない。チョッピリしか作れないものは名物ではないという。まこととでもな話である。（中略）「カマボコ気に入つたらもつと持っていきなさい」と若者は言ったが荷になるからと言つてことわつた。そんなに呉れてやっついては商売にならないだろうと思つたが、そういうところに萩の町人の気質がうかがわれるのではないかと思つた。こうした町をもつとあるいて多くの人と話しあつてみたいと思つた。

写真は浜崎の旧大竹蒲鉾店（平成十二年まで営業）で撮影された。カマボコを焼く上半身裸の若者は故柳井一利さん。小鯛やエソ・イトヨリなど、地元で水揚げされる新鮮な原料にこだわり、一枚一枚包丁で板に盛り付け、炭火でじっくり焼き上げる、昔ながらの製法をかたくなに守り貫かれたと聞く。

萩の魚市場



▲漁船 (昭和36. 9. 5)



◀萩の魚市場 (昭和35. 8. 1)

前項のカマボコを焼く若者の話を聞いて萩の魚市場を訪れる。

「魚市場にいつて見なさい。小さな魚市場ですよ。荷あげする魚の量は知れている。いま萩では海から上がる魚より、下関あたりから貨車でおくられてくる魚の方が多いいですよ」とカマボコ屋は話してくれた。その話は事実であろう。思い切って大きな築港でもしなければ萩の発展はないという。

宮本が訪れた頃の魚市場も、ほぼ現在の浜崎卸売魚市場の位置にあった。その規模もほぼ現在と同等。船曳網によるシラスやカタクチイワシ、小型底引網や打漕網などによる底棲小型魚介類を中心に、当時の水揚高は五百トン弱と記録されている。写真に写っている漁船（網船）は今では見ることもできなくなった木造の動力船、定置網の運搬船と思われる。

浜崎卸売魚市場は平成十三年の漁協合併に伴う魚市場統合にも飲み込まれることなく、主として加工事業者向けの魚市場として現在も市場機能を果たしている。

浜崎魚市場や港の写真は、見島へ渡る船便の待ち時間を利用して撮ったであろうと推測される。定置網のアンカーに使う砂袋を満載した大型動力船をはじめ、大小さまざまな漁船の写真やそこで仕事する漁師たちの姿、浜辺いっばいに広がるシラス干しの様子や、対岸の鶴江浦の家並みなど、潮風が香るような写真が多く撮られている。

如画翁の自傳

映画館前の自転車



▲萩市内所見（昭和35. 8. 1）

宮本は整然とした町並みよりは、庶民の生活が匂う雑然とした町の風景を好んで撮った。萩市内で撮影された画像も、武家屋敷や城跡・寺院など、いわゆる萩らしい風景より、庶民が遅く生活する商店街や浜崎界隈の写真が圧倒的に多い。

八月一日に島にわたることになっていたので、朝小郡をたって昼まえに萩についた。このまえ来たときと違って郷愁に似た気持はなかった。それよりもまず、民俗に興味を持っていることから、武家町よりも商人町の方があってみたかった。その町をあるいてみても当時はまだ自動車も少なく、道がいかに広い感じがしたし、ゴタゴタした看板も少なかった。映画館の前には自転車が整然とならんでおいてあるのが印象的であった。見物客自身がならべたのか管理する人がならべたのか。当時はまだテレビがそれほど普及していなかったから映画隆盛の時代であったが、これを見物する人たちが、いかにも生真面目に思えた。昼の日中にたくさん見物客があるのだから、ヒマな人も多いのだと思いつつ、それを見る人たちの心の底のどこかにキリッとしたものがあるように思えてほほ笑ましかった。

宮本が「映画館前」として記述した写真（12ページ）は、実は東田町のバチンコ店モンテカルロ前。映画館（喜楽館）は、ここより北の吉田町にあった。調査の旅から帰ってかなりの時間が経過した後、写真とメモを見ながら記憶に頼って執筆したため、場所を錯誤したようだ。

古い町の面影



▲萩の町には看板が道に対して直角にあげてある昔風のものが多かった。
(昭和35. 8. 1)



◀ 部戸のある民家 (昭和36. 9. 6)

メインストリートからそれると、そこにはそれぞれ古い町の俤があった。たとえば町家で部戸しとどのある家の多いのが目に付く。昔は町家はほとんど部戸であった。それが昭和時代から次第に引戸ひきど(妻戸)にかわってくる。

部戸とは古いタイプの防犯用雨戸のこと。引戸が左右にスライド収納するのに対して、部戸は上にスライドして吊り上げ収納する。現在ではほとんど見ることができなくなった古式日本建築の建具様式。看板は近頃、家の小屋根に大きなものをべったりと張り付けたようにしているものが多いのだが、家の正面には直角にかかげたものが目につく。質屋も料理屋もそうした看板をあげている。昔はそれがケヤキの板などに彫りつけてあったが、今ははりぼて式で、中に火がとまるようになっていて、道に面した長屋造りの家に入出口がついていて、家の奥にある家へ通ずるようになっていて。京都で多く見かける住居形式がここにもある。この町の人たちは古くからの生活をくずしていないのである。

これらの写真以外にも、道路をまたいでアーチ状に取り付けられた味噌屋の看板、瀬戸物の露天売りや団扇製造の様子、酒屋の裏手に積まれたビール瓶の山、露地奥に見える裏町などなど、普通の観光客には目にとまらないであろう街中の風景がフィルムに収められている。人物の写っている写真は数少ないが、これらの写真すべてに、しっかりと人々の生活の息遣いを感じられるのも、宮本の写真の特徴であるように思う。

新吉祭の旗日

住吉祭礼の前日



背負い山▶
(昭和35. 8. 1)



◀住吉祭礼の船屋台 (昭和35. 8. 1)

萩市内で撮影された写真を現在の行政区で分類すると、一番点数が多いのが浜崎地区。昔の商人町の面影をもっとも色濃く残したエリアとして、宮本の気持を引きつけたのだと思う。宮本が浜崎を歩いたのは昭和三十五年の八月一日、浜崎の町は、住吉神社の夏祭り前であった。

町はちょうど住吉神社の祭のままで街路には船山が引き出されて飾りつけをしようとする前であった。また瀬戸物屋の店先には背負い山がかざられていた。

山車だしに発達する前の造山つくしがこの町に残っていることに宮本は関心を持ち、
「こういうことについてもいろいろな話をきいてみたいものであるがそのままになってしまっている
と心残りを記述している。

また、この町は城下町的な歴史を追及するばかりではなく、城下町を守り育ててきた民衆の力を見直さなければならぬのではないかと思う。この町の学術調査を試みたいものである。

村や町の形成という大きな観点から地域を見る宮本らしい感想。幕末期から明治初年、萩は歴史の表舞台に躍り出た。その歴史的資産ばかりがちやばやされる向きがあるが、この町を支えてきた名もない庶民たちの営み、そして背後にあって萩に物資を供給してきた山村の人々の暮らしに、もっと目を向けていくべきだと宮本は言う。現在および今後の萩を考える上でも、心に留め置かなければならない言葉だと思ふ。

背負い山

鶴江浦 礼の前日



▲鶴江の漁村。手前は松本川（昭和35. 8. 1）



▲鶴江の渡し場（昭和35. 8. 1）

農業を主業とする集落を「地方」と呼ぶのに対して、漁業集落を「浦方」と呼んだ。萩には浦方の村が数多くあり、そのうち鶴江・玉江・浜崎は城下町に魚介を供給する重要な漁業拠点であった。

そして玉江は幕末の頃には漁船が百十九艘をかぞえるこの付近最大の漁村になっており、鶴江も百十六艘で、玉江と肩をならべる漁村であった。鶴江は松本川の右岸にあって、萩の浜崎と向かい合っている。そして今も昔の俵を多分に残している漁村である。

対岸の浜崎から川越しに見る鶴江の漁村に興味を感じている。写真に鶴江の漁村を内部から撮影したものが無いことを見ると、時間の制約で、対岸に渡って鶴江の集落内を歩くチャンスに恵まれなかったようだ。当時は、各漁家の裏手（松本川側）に石段が切られていて、そこに漁船を係留していたことがこの写真より判る。なかには、松本川側に張出すように川床を作り、床の上部は網干場や漁具の置き場として利用、その下部に舟を係留した漁家もあったようだ。

浜崎から鶴江に渡る渡船場（鶴江の渡し）は、しつかり宮本のカメラに収められている。かつては、ここ鶴江以外にも川を渡る渡船が多くあったが、現在残っているのは鶴江のみ。近頃、この渡しを利用する方はごく少数だが、当時は幼い子供からお年寄まで、普段の生活の足としてさかんに利用されていたことがこの写真でわかる。

日本一の城下町



▲厚狭毛利家長屋（昭和36.9.6）



▲平安古 鍵曲（昭和36.9.6）

見島調査の行きかえりに、萩郷土博物館の山田氏（故人）の案内で萩城下を歩いている。宮本が訪れた日本各地の城下町は百二十カ所にのぼる。武家町が昔の姿をとどめているところは少なくなってきたが、その中で、ここ萩が古い面影をもっともよく残しているのではないかと、記述している。それを単に事象として認識するだけでなく、では何故そうなったのか、と考察するのが宮本らしいところ。「新しい文化の刺激が少なかったから」という人が多いなか、宮本はそれに対しては否とする。萩よりもっと刺激の少なかった城下町で昔の面影が消失しているところがあるからだ。

明治維新から廃藩置県を経て、東京・山口へと萩を出て行った一派と、この町を捨てきれず萩に残った一派のせめぎあいだと宮本は分析する。その後の前原一誠の乱に象徴されるように、萩に残った人たちは心を閉ざし、頑（かた）ななまでに古いものを守ろうとした。一方、萩を出た士族も、没落して家売って出て行ったのではなく、多くは萩に屋敷を残している。出世して身分が高くなるにつれて懐旧（わいじゆ）の情は強くなり、その屋敷も大切にされた。つまり町の中には古い生活を崩すような要素がきわめて少なかったからだと言論している。

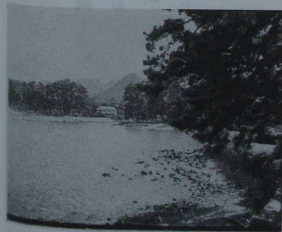
また、ところがもう一つ、萩を支えた人たちがいた。それは周辺の村々であった。周囲の村の人たちは萩を取引先にするにはやめなかった。薪も炭も買ってくれることは少なくなつて、それが生活を圧迫しても、やはり生産したものは萩に売らねばならなかった。と同時に生活に必要なものは萩から買わねばならなかった。そこには古い流通機構がそのまま生かされていた。とも考察している。

菊ヶ浜

の城下町



▲菊ヶ浜 (昭和36.9.6)



▲菊ヶ浜 (昭和36.9.6)

宮本は白砂青松の菊ヶ浜を陸から、そして見島にむかう船の甲板から見ている。

とにかく人口六万近い大きい町がそこにあるのだが大きな煙突が見えるわけでもなければ、建物の姿が見えるわけでもない。空がぬけるほど青く、山の稜線がくっきりとしている。およそ近代的な風景はここには見えない。今から百年ほど前には指月山の下に城の天守閣が見えていたはずだが、それ以外はここ百年あまりの間この風景は何一つかわっていないはずである。私にはまたそれがすばらしいことに思えるのである。停滞しているといえればそれまでだが、人口六万近い町の周囲にこんな自然の残されている例はあまりない。

宮本には、大きな工場も持たず、軍の連隊もおかれず、官庁の大きな出先機関もないこの町に、六万人もの人々が暮らしていることが不思議であったようだ。同時にそれだけ多くの人々が日々の生活を通じてながら、これだけの自然景観が残ったことにも驚いている。ここ菊ヶ浜だけでなく、笠山・越ヶ浜・中の台・鶴江台など萩に残る貴重な自然景観を、現代の人々のために、もっと思索や教養や休息のために利用される工夫があるべきだとも述べている。とかく歴史観光偏重の風のある萩、その町が併せ持つ自然景観の資産を、もっと有効に活用すべきとの意見である。

写真の菊ヶ浜、築堤の形状や松並木など、現在の景観とほとんど変わらない様に見えるが、よく見ると、手前の小浜の砂浜が現在よりかなり狭いことがわかる。この当時、この浜では大きなハマグリがいくらかも獲れたと聞いた。

見島丸



▲萩港 見島丸がとまっている 右の民家は鶴江 (昭和35. 8. 1)



◀見島丸の甲板 (昭和35. 8. 1)

昭和三十五年八月一日、見島学術調査団の一員として宮本ははじめて見島に渡った。写真は定期船見島丸の着岸風景、タグボートの後ろに写っている貨客船が見島丸(百トン)、現在の高速船「おによーず」に比べるといかにも小さな船で速力は十ノット程度、見島まで二時間半の行程であった。

見島にゆく船は松本川の川口近く、浜崎の岸壁から出る。魚市場のすぐ近くである。夏休みのためか乗客は多い。荷物も多い。

宮本は全国各地の連絡船に数多く乗り、その度にその乗客の様子や、積荷を写真に収めている。見島丸でも同様に、甲板上で談笑する人々や、レーダー基地用のジープの積み込み作業にもカメラを向けた。見島に到着するまでの船中でも、乗客たちの行動観察を忘れていない。横になつて眠りにつく少年、大きな身振りで話をする青年、ほんやりと景色を見る人、宮本のカメラに気づいてレンズ目線の女性など、話声が聞こえてきそうなほど、いきいきとした情景が見事に切り取られている。

港を出ると海は広く青い。その海に低い台状の島がいくつも浮かんでいる。羽島・肥島・大島・櫃島・尾島・相島がそれである。その六つの島がもとは六島村を形成していたが、今は萩市に合併している。

「私の日本地図⑬・萩付近」に記述されているこれら見島に向かうくだり、文章がいつもになくリズムカルで、はじめて出会う見島への、宮本自身の気持の高まりが現れているように思えてならない。

イキウラスキ

トキワススキ



▲トキワの風垣（昭和35. 8. 4）



◀山小屋 屋根も壁もトキワで葺いてあった。（昭和35. 8. 7）

トキワとはススキに似た背高の植物でオニガヤとも呼ばれる。暖かい地方に生え花期が早く六月頃に
出穂する。大きなものは背丈二メートルを越え、古くから防風のために、田や畑の畦に植えられた。

島が近づいてくると、島の丘が段々になっていて、その段々が白くぼやけたように光っている。
それが異常な感じがする。その白くぼやけているものは上陸して島の中をあるいてみてわかったの
だが、風除けのために植えたオニガヤなのである。この島ではトキワといっている。

かつて、トキワの風垣は山口県の海岸地方には普通に見られ、それが独特の景観を作っていたという。
宮本が見島を訪れた頃、周防大島など瀬戸内側では農作業の邪魔になるという理由で次第に減少してきて
いた。

見島にそれが多く残っているのは、まだそれを必要とすることが多いのである。（中略）トキワ
を植えておくと畔も丈夫であった。田の畔には石垣を築いたものも多いが、畑の畔は土畔で、トキ
ワを植えておけば崩れるようなことはほとんどなかった。

防風や田畑の畔補強といった目的以外に、物置や農小屋、網籠や物入れなども、このトキワで作られて
いる様が数多く写真に収められている。

現在でも少なくなつたとはいえ、八丁八反やその周辺にある段々畑に、まだこのトキワを見ることがで
きる。ススキに較べ格段に背丈が高く、幹もがっしりしていて、防風の途に使われたことは現物を見ると
納得できる。

船着き場 スキ



▲船がつくと島の人が出迎えに来る（昭和35. 8. 1）



▲見島本村の港（昭和35. 8. 1）

港の船着場は島の唯一の玄関、外界からのものはすべてここから運ばれてくる。どこの離島でも例外なく連絡船の到着時間になると荷揚げに従事する人や出迎えの家族が大勢集まってくる。そしてとりたてて用事も無い人たちがまでもが、港に近づく船の姿を認めると、三々五々船着場に集まってくる。離島にとつての港とは、何かしら心待ちする、何か新しいものに出会えそうなの、どうやらそういう場所のようだ。見島にはリーダー基地があるため、そこで使用する大型物資を荷揚げするための棧橋が早くから整備された。連絡船の見島丸もこの突堤に着岸する。突堤の根元には待合所があり、ここが島最大のターミナルとなっている。

われわれはそうした島人の横を通して、狭い道を役場の支所へいった。あとから来る若い女の二人連れ、一人は迎えにいった人、一人は船で戻って来た人。「海が凧なまこでよかつたの」「はア、今日はほんとによい日でした」海をわたる人にとって海が荒れているか、静かであったかが一番大きな問題で、静かであるとはっとする。島に住む人たちは海におびやかされながら生きて来ているといい。

なにげない島の人たちの会話を聞いた宮本のこのコメントは、決して単なる旅行者のそれではなく、島に住む事の苦楽を知り、島に住む人たちと同じ視線に立って発せられたものだと感じる。

浦方と地方



▲見島本村東港 突堤が右から出ている。
今左からも出ておきな漁港になった。(昭和35. 8. 3)



◀漁家はみな蔀戸をもっている
(昭和35. 8. 2)

写真は見島本村^{ほんぢ}を丘の上から見下ろしたものだ。

村でも町でも新しくたずねていったところは必ず高いところの上って見よ、そして方向を知り、目立つものを見よ。(中略) 高いところでよく見ておいたら道にまようようなことはほとんどない。

(宮本常一著作集①民俗学への道)

この言葉は、十五歳で郷里を離れた宮本に、父親が餞^{はなむけ}として贈った十ヶ条の人生訓の一部。宮本は父の教えを見島でも忠実に守っていたようだ。

浦方とは漁業集落、地方は農業集落のこと。見島本村の当時の戸数は約四百戸、そのうち浦方が百八十戸、地方が二百二十戸ほど。地方と浦方は、氏神^{うぢがみ}も別で、庄屋も個々に置き、軒を接しながらも通婚がほとんど無かったという。宮本はその境界線を探そうと島を歩き続けた。

そのようにしてあるうちに気がついたことがある。村の家の中に蔀戸のある家と引戸(妻戸)のある家とがある。そこで村の中をまわりしてみた。すると海に遠いところにある家はすべて引戸になっている。家の前には物を干すことのできる広場がある。海岸に近い方の家は殆んど蔀戸になっている。引戸の家と、蔀戸の家の間には境がはいる。

こうして、普通の人には見えない村の境界線を宮本は見出した。

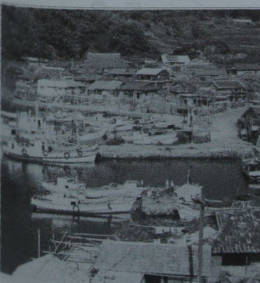
それだけではない。農家の方は田の字型の四間取りが多いのだが、漁家の方は居間が一列に並んでいる。漁民と農民では生活のたて方が違っているのである。

なお、見島本村の浦方については、「宮本常一著作集⑦ 宝島民俗誌・見島の漁村」に詳しい調査報告が収録されている。

中村清次郎翁



▲年寄の世間話 右が中村清次郎翁 私もこの仲間に加わって半ときほど話を聞いた。漁の話が主であった。(昭和36.9.5)



▲見島港突堤 見島丸がついている (昭和35.8.2)

今一つ見島でつよく心をひかれたことがある。それは年寄たちの伝承である。(中略) その中でもっとも心をつたえたのは中村清次郎翁であった。中村翁は海の近くの小さい藁葺の家に住んでいた。この翁からはもっとも多くの時間をかけて話をきいた。翁の話の中で心をつたえたのはその生き方であった。

中村翁は明治三十二年にハワイ移民として海を渡る。ホノルルで船員となり、その後ミッドウエーに渡り、発動機船の乗員となる。発動機船の知識技術を身に付け、明治四十年ごろ帰国、見島に戻りその頃導入されたばかりの発動機船に乗り鮮魚を運搬した。次第に発動機船が普及し始めると、造船技術の指導から操船技術に至るまで、その指導者として活躍することになる。六十歳までは萩と見島を結ぶ小さな運搬船の船長を務め、その後は隠居し、無動力船で細々と磯魚を獲る日々。

気付いてみたら藁葺の小さな家に住むようになっていた。その生涯を誠実にしかも充実して生きてきたのだが、老年には身一つに近い生活になっていた。しかしこの翁がミッドウエーからもたらした知識と技術が島の産業開発に大きく貢献したのである。「もう九十に手が届くのですが、まだ沖へ出て働いていて、誰の世話にもなっていません」と翁は語った。私はこの翁の元気な間に少しでも多く聞いておきたいと思って、昭和三十五年も三十六年も翁の話を記録した。しかし三十七年に島にわたったとき翁はもう死んでいた。

写真の撮影された場所、多分本村の漁港奥まった船溜まり前の路地だと思われる。島を訪れると、今でもこの場所にはお年寄たちが日向ぼっこをしながら世間話をしている風景に出会う。

宇津海岸の石垣



▲宇津海岸の石垣 北から見る (昭和37. 8. 29)



▲港の突堤に藁が干してある (昭和37. 8. 29)

見島に渡ると石垣が目につく。家に周囲に廻らせた割石の石垣もあれば、海岸にある丸い石を巧みに積み上げたもの、また丸石と割り石を組み合わせたもの、石垣の上に築泥し、その上に瓦を乗せた立派なものも。多分、萩の町にいた石垣職人がやってきて築いたものであろうと宮本は推測する。

石垣が美しいのは宇津である。宇津の海岸に面して石垣がならび、その上には白い漆喰の築泥塀がのせられている。石垣の下は道、道の沖は大きな石を積んだ石垣である。これは見ごとな演出で誰の発想であろうかと思う。このような風景は沖からの望観を意識してのことである。

残念ながら現在は港湾整備で埋め立てが進み、沖から望むこの美しい石垣の景観は見ることができなくなっている。

宇津には明治の終わり頃まで、風待ちや時代からの避難のため北前船がよく寄港した。宇津には遊女も芸者もおらず、家々の娘たちが酒の相手をしててなしたという。この地に日本各地の民謡がたくさん歌い継がれてきたのも、その名残と言われる。ただ、宇津は他国の船人を相手に商売をしなければ生活の立たないようなところではない。

船人たちのもてなしは、余分のようなものであった。そうした心のゆとりがこのような景観を生み出したものではないかと思ふ

と宮本は考察している。

宇津は本村と違って半農半漁の村。下の写真のように漁港の突堤に収穫後の藁束が干してある風景など、それを象徴するものかと思ふ。

※「道の沖」とは道の海側の意(編集部)

ジコンボウ 石垣



▲ジコンボウの古墳 (昭和35. 8. 4)



▲高見山の上からジコンボウ海岸の石垣を見る (昭和35. 8. 4)

見島に残る九、十世紀の古墳跡とされるジコンボ、宮本は多分「慈光坊」とでも書くのであろうと推測している。一八〇基にもおよぶその一つ一つを丹念に見て歩いている。

おそらく、この島に住んでいたものが死者をこの浜に葬ったものかと思うが、あるいはまた本土の方から海の彼方に常世の国をもとめてやって来て、ここに死体を埋めたものであるかも知れない。

海の彼方の島に死体を埋葬する、そのような風習は「鎮め島」といって九州の海岸地方にはいたるところにその例が見られるという。また、見島のもうひとつの集落である宇津の北にある観音堂の先には、小石が積み上げられた「賽の河原」がある。そこには島民だけではなく、遠く本土側の大井から島に渡って、戒名を書いた小石をここに納めて行ったものだという。

宮本が訪れた当時もすでに多くの古墳が盗掘され、またその古墳の石は、防風のために石垣を築く格好の材料となっていた。

古墳をこわしてまで石垣をつくるとはけしからんと非難もありそうだが、いっしょに歩いてくれた島の人のことばが身にしみた。「今は海は静かですが、波風のつよいときの島は大へんなのです。潮がそのまま吹きざぎられて風とともにたたきつけてくるのです。何も彼も吹きざぎられ、吹きとばされていってしまいそうです。松を植えても育たないのです。(中略)身を守るための石垣であり、島を守るための石垣である。つまり石垣もまた島民のためのりっぱな文化なのである。これからはコンクリートで防波堤をつくることができよう。これまでは周囲にあるものを利用するよりほかに方法がなかった。

墓の城



▲高見山の上から見た墓地の石垣（昭和35. 8. 4）



▲墓は石垣にかこまれている（昭和36. 9. 5）

古墳のあるジコンボウの西の高見山なみやまの上に立つて北を見ると、そこにはまた異様な風景がある。丸い石を積み上げて四角に区切った屋根のない住居を思わせるものが、広い区域をしめている。そこは墓地なのである。（中略）しかし全く見事なものである。規模の小さなものなら佐渡などでも見かけたが、このように見事なものは見島以外ではまだ知らない。

現在の墓地も多少規模の縮小は見られるものの当時の姿で残されている。通常の墓地に較べその一区画あたりの敷地はゆったりとして、沖繩に見る墓地に似ていると感じる。常にきれいに掃除が行き届き、お盆や彼岸の時期以外でも花の供えられている墓が多い。大切にお守りされていることの証かと思う。

宇津というところは、まるい石の少ないところで、まるい石垣の墓地はあまり見かけない。囲は竹や板でなされていた。墓の周囲にかこいをする事はこの島の古くからのならわしのようで、墓にも強い風をあてないようにしようとしての心からであろうか。

宇津の墓地は、石垣ではなく板垣や竹垣で囲まれている。それにしても、この宮本のコメント、センチメンタリズムといえはそうかもしれないが、島の人たちに対する慈しみの気持にあふれていると感じる。

二段の池



▲水落しの日 宇津 (昭和37. 8. 29)



▲八町八反の池は底が二段になっているものが多い。
ポンプのできるまで、水汲みは大変な作業であった。(昭和35. 8. 4)

島には大きな川も池も湖もなく、水田を作るに当たって、絶えず水の確保に大変な苦勞をしてきた。今では八町八反の上に見島ダムが完成し、水の供給体制は整備されたが、それまで、農業用水については天に頼る以外になかった。今でも農地のあちこちに灌漑用の深いため池が見られる。普通に見ればこまだが、宮本の視線はさらに深い。

池の周囲はまるい石でできずきあがっており、土がくずれないようにしてある。その池の底が二段になっているものがある。(中略) 高い池の方で水を汲み、高い池の水がなくなると、低い池から高い池に水を汲み上げ、その水をさらに田に汲み上げたものだという。(中略) そして、池の底の水がつぎるまでに穂が出てくれれば豊作だったのである。

このように苦心して確保した田の水も稲刈りの前には落としてしまふ。その水落しの日は島の人たちにとって待ち焦がれた日でもあったという。

宇津は川らしい川のないところで、この落とし水がいちばん豊富な水量で、水落しのときは村の女たちは水の落口のところへ集まって洗濯をする。子供たちは水浴びをする。水のほとりにたくさんの人たちが入れかわり、たちかわりして談笑しながら一日中洗濯が続く。一日だけではない。天気をつづつかぎり、水のあるかぎり、この風景は見られる。島では水がどんなに大切にされ、また有効に利用されているかをこうした風景に見ることができる。

島のこども



▲天下泰平の夢 海の子はこうして育つ 宇津 (昭和37.8.29)



▲島のこどもたち (昭和37.8.29)

宮本は全国各地で多くの子供たちの写真を撮っている。「天下泰平の夢 海の子はこうして育つ」とキャプションを附されたこの写真は、その中でも代表的な一枚、傑作として知られる。漁網の上で昼寝する男の子、すぐ下は波立つ海、写真の左隅には帽子をかぶった撮影者・宮本の影も映っている。多分この時、宮本は笑顔を浮かべながらファインダーを覗いていたのであろう。見るものの心を無条件に和ませる良い写真だと思う。写真のモデルは、見島宇津地区在住の北国一行さん。北国さんは幼い頃から祖父と父の船に乗って沖に出た。建網を仕掛けに行く船の上でうたた寝しているところだろう、写真を撮られたことは全く覚えていない、とのこと。

幼い頃よりその生業を身近に見聞き経験し、見様見真似で仕事の面白さや厳しさを覚えていく。企図しない自然な生活職業教育のシステムがそこには機能していた。北国さんは中学生の頃になると建網で魚を獲って小遣い稼ぎをし、ごく自然な形で漁業に従事、漁の傍ら旅館も経営するようになった。

前々項の「水落しの日」の写真も含め、見島の子供たちを撮影した写真は数多い。そのどれもが実にほのぼのとしたカットばかり。現在のようにTVゲームやネット遊びに毒されていない、元気で素朴な「良い顔」がそこにある。下の写真は、港に網船が着岸したところに集まってきた子供たち、網からこぼれる小魚を拾っている様子であろう。女の子の髪型や服装が、良き昭和の時代を感じさせる。

里子の島も羽島



▲羽島の舟着場（昭和36. 8. 29）



▲羽島の農家（昭和36. 8. 29）

昭和三十六年八月二十九日、宮本は秋の六島を廻った。最初に上陸したのは本土から一番近い羽島。当時の羽島には人家が十戸、人口は八十四人、一戸あたりの平均家族数は、教員世帯を除くとなんと十名と多い。

これは本土から里子をあずかる風習があったためで、どの家にも一人か二人は里子がいた。これは明治初年頃からの風習であったようである。（中略）島に上陸してみるとどの家も大きくりっぱで、一見してその富裕であることがわかる。

明治維新後、禄を失った秋の士族たちの生活は窮乏し、養いかねた子女を、暮らしの楽な島に里子に出した。羽島の人たちはそれを快く引き受け、我が子と同様、分け隔てなく大切に育て、成長するとその親元に帰したという。その風習は昭和になっても続いたと聞く。

そのように豊かな暮らしが立てられた羽島も、昭和四十六年、島民は島を捨てる決意をする。もつとも大きな要因は、子供たちの教育の問題であった。少しでも良い教育環境を、ということから本校に学寮を設け、そこから本土の学校へ通うようになった。島から子供たちがいなくなったのである。

島に子供の声がいなくなった。夕餉の膳も急にさみしくなった。それは島に住むものにとつては耐えられないことであった。（中略）親たちはみな子供と共にあることで仕合せであり、未来への夢を託することができるのである。この島には古くから人が住んだ。小学校の校庭にある地藏様たちの端におかれている五輪塔や宝篋印塔の残欠を見ると、五、六百年もまえにこの島にはかなりの豪族が住み、それ以来住み続けた島である。しかしいま住居の歴史は終わった。

オイコ談義 相島



相島 ▶
(昭和36. 8. 29)



▲オイコで砂を運ぶ女たち 相島 (昭和36. 8. 29)

私たちの船が突堤についたとき、島の人たちは突堤の上に積み上げている砂を運んでいた。砂は桶に入れてオイコで背負っている者もあれば、トリノスという負籠で運んでいる者もある。砂は重い。その重い荷を一荷ずつ背負って坂をのぼっていく、大変な苦勞である。

島での上水は、井戸ではなく屋根に降った雨水を水槽に溜める方式。それが、船着場付近の崖下から良質の水が大量に湧出しているのが発見された。砂を運ぶ作業は、この水を台地上にポンプで送って各戸に供給するための工事であった。相島の集落は船着場のそばではなく、長く急な坂を登った高台にある。現在は軽自動車を通れる舗装道もできているが、港から台地上に向かう坂道（旧道）は急峻で、空身でも登るのに息が切れるくらい。美しく積まれた石垣の美しさは訪れる者の感動を呼ぶが、この坂を数十キロの砂を背に、一日に何往復も、というのは超重労働だ。

この島の人たちは長い爪のついたオイコを皆背負っている。爪が長いのは島の人たちが大きな荷を背負った証拠である。

本土からの荷はすべてこのオイコで運ばれた。その中で一番多かったのは畑の肥料となった下肥である。萩の沖合いの島々は例外なく、本土から下肥を汲み取って運搬船で運び、船着場そばの肥溜で熟成、それを桶に入れて台上の畑に運んでいた。その下肥も無料ではなく有料で萩の町家から買取っていたという。昭和の半ばで合成肥料等に移行、荷の運搬もトラックと軽トラックの相の子のような動力運搬車が主力となったが、現在でもオイコはちよとした荷を運ぶのに現役で活躍している。

災害救助工場の負の負担

災害復旧工事の負担 尾島



▲尾島の本通（昭和36. 8. 30）



▲学校へゆく道（昭和36. 8. 30）

宮本は相島から尾島に渡った。当時の戸数十戸（うち教員住宅三戸）、人口は八十七人、先の羽島とほぼ同等。小さな島にしては立派な防波堤がある。昭和二十一年の台風で島の海岸の石垣が崩落、それを災害復旧で再生し防波堤も築いた。ところがその後の会計検査で災害復旧工事と認められず、工事費の六割が島民負担となった。それは当時のお金にして二戸あたり年間三万円で十年返済、実に重い負担であった。一見平和に見える小さな島も、かつて見島が共同負債に苦しんだように、大きな借財が島民に重くのしかかったのである。島民が頼ったのは確実に収入が得られ、専売局の保障も得られる葉タバコの栽培であった。

島では長い間ランプの生活であった。それを昭和二十五年に農協から五十万円借りて自家発電することにした。その償還も荷になる。（中略）どんな公共工事をやっても必ず地元で重い負担がかかってくる。一見たいしたことはないように見えても、戸数が少ない上に、生活費や税のほかに実に多くの負担があるのが地域社会の特色である。

このような小さな島の生活基盤を造る工事くらいは何とか全額を国庫補助でできないものか。それは国全体から見ればほんの僅かな金であると、宮本は嘆く。

葉タバコの栽培で活気を取り戻したこの島も、羽島と同じ子供たちの教育という問題にぶつかり、やがて、全員が島を離れる申し合わせすることになる。現在では、写真のような本通があったとは信じられないほど、ひっそりとした無人島である。

この島は、共同負債の重み

この島にも共同負債 櫃島



▲雨水をためて用水飲料水にする 櫃島 (昭和36. 8. 30)



▲島の小学校 櫃島 (昭和36. 8. 30)

尾島から大島に向かう途中に櫃島がある。戸数十三戸、人口一〇六人、羽島や尾島より島の背が高く、海岸は断崖で台地の高さは約九十メートル。その断崖を稲妻型の道路が船着場から台上に上っていく。この島の東海岸はブリの好漁場で、島民が共同で各戸四十万円を出資し、さらに金融機関から千百万円の借入れを起し、ブリ大敷網(おとしあみ)(定置網)を経営した。ところが魚道が変わったのか、さっぱり漁が振るわず、借入金が大きく膨らんでいった。島を売却して負債整理を考えたものの、このような条件の悪い島には買手などつくはずがない。債務償還の決め手は、尾島同様、葉タバコの栽培であった。年間一千万円の生産を上げ、その中から三百五十万円を返済にあて、十年間で完済しようという計画、それをこの島の人たちは見事に完遂したのである。

島が借財のために一番困ったときにはラジオまで売ってしまった。それをトランジスタラジオを買い求め、さらに海底送電を計画して、常時電力の使用できる島にしようとの計画を進めていた。私たちは小学校に集まってもらった島の人たちからそうした話について聞いた。この島の人たちの眼にはかがやきがあった。大きな借金を払いきることのできた自信がそれを生み出したのである。(中略)限られた時間で島の人とも十分話す間がなくて別れをつけてきたのだが、いまでも心に残る島である。

平成十九年現在、この櫃島の住民票上の戸数は七戸、その方々も本土側に住居する期間が長くなっていると聞く。

六島村の中心 大島



▲大島 (昭和36. 8. 30)



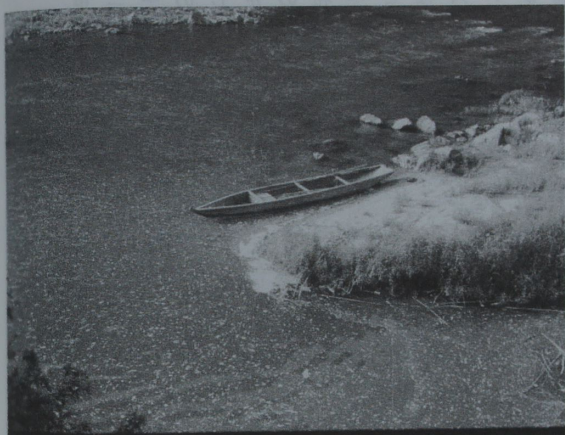
▲肥納屋 大島 (昭和36. 8. 30)

萩市に合併する前、萩沖の島々は六島村という独立した村を構成していて、その中心が大島であった。昭和二十八年、伊豆大島で全国離島振興協議会の第一回総会が開かれ、六島村の村長であった浜村善作翁に宮本は会っている。その時の印象をこう記している。

その頃の離島の町村長には一種の風格を持った人が多かった。泰然としていわゆる物欲しい顔をしていないのである。そういつたら失礼だけれども近頃政治にたずさわっている人には品のある人が少ない。しかし、昭和三十年頃までは印象にのこる風格を持った人が何人もいて、いまでもその人の顔をありありと思い出すことができる。浜村翁もその一人であった。

昭和三十六年八月三十日、宮本が大島に渡った時、この浜村翁が港の突堤で出迎え、久々の再会を果たす。島をあげて経営する大敷網がここ数年不漁で、そのため再会した浜村翁に以前のような元気がなかったという。大島は六島のなかで一番大きい島で、漁業に依存する度合いが高い。大規模な大敷網を筆頭に、建網十七統・イワシ網二十一統・棒受網十統・中型播網三組として一本釣り、それらに従事する漁船数も二六〇隻を数える漁業基地であった。現在も捲網漁を中心に、萩管内でトップシェアの水揚量をマークしている。一方、台地上に広がる広大な農地では、葉タバコを中心に、甘藷や玉葱を栽培。近年ではプロックリが島の名産として有名になってきた。写真(上)は海岸沿いの集落より台上の農地に向かうコンクリート舗装の坂道、左の人が背負うトリノス型の背負子は、今でも現役で活躍している。下の写真は、肥料となる下肥(糞尿)を貯蔵する肥納屋。この島も下肥を本土の萩の町へ汲み取りに行っていた。藩政の頃は無代であったものが、明治の半ばには有料となり、その負担に耐えかねて離農した家もあったという。

阿武川の流域



▲阿武川と高瀬船（昭和43. 8. 9）



▲カニウケ 飯館（昭和37. 9. 6）

昭和三十七年、見島調査の帰りに宮本は郷土史家の誘いで川上村を訪問している。上流にある湯の瀬の村営ホテルで休憩し、江舟、野戸呂を歩く。野戸呂では村芝居の一座を組んで興行している人の家を訪ねていく。

山中の民は一見閉鎖された社会に住んでいるように思われるけれども決してそうではない。かえって意外なほど広い世間へつながっているものである。この地の人は芝居を興行して村々をあるいているばかりでなく、黄金の鯉も飼っている。あるいは平地の村などよりも世間の推移に対しては敏感であるかもわからない。

野戸呂では軒下に棚を造って地蔵をまつた家に目を止めている。普通、地蔵は露天に立っているもの。不思議に思っその理由を村人に尋ねてみるが、昔からそうしている、理由はわからないという。宮本は、家の軒下に小さなお堂を建て、そこに奉った京都の町中の地蔵を思い出し、習慣の共通性に想いを馳せる。写真（上）は、阿武川の流れと、荷の運搬に使用された高瀬舟。木炭や木材など阿武川とその支流の物産は、川上村の筏場かたばたに集積され、そこから川舟で萩城下に運ばれた。また山村の人々が必要とした生活用品もこの川舟で萩の町からもたらされた。この川は、萩のまちとそれを背後で支えた山村をつなぐ物流の動脈だったのだ。下の写真は、ツガニ（モクスガニ）を捕らえる竹製のトラップ、現在では漁網で編んだ四角いカゴ状の市販品を使うことが多くなった。

日本で一番美しい村

佐々連



川へ下りる道 佐々連
(昭和43. 6. 29)



子供たちの通学名札 佐々連 (昭和43. 8. 2)

昭和四十三年の夏、阿武川ダムによって水没する地域の民俗緊急調査団の一員として、宮本は阿武川上流域の村々を再訪する。

何百年というほど久しく住みついできたところを立ち退かねばならないということについて、みんな割切れない気持を持っている。そういう人たちから話をきいて記録を残すことにどんな意味があるのだろうか。そういう疑問もわく、しかし、ダムを造ることは事実であり、そこに住む人たちが立ち退かねばならぬことも事実である。とするとそこで生活してきた姿を記録しておくことも立ち退く人たちにとって、何らかの記念にもなるであろう。そんな気持で村をおとすれた。

水没地区は川上村の藤蔵・大藤・高瀬・木津原、福栄村の清宗、飯館、佐々連の七集落。川上村側の四集落を歩き、その後、平家の落人伝説のある清宗を経て、谷底にある飯館、そして最奥部の佐々連を訪れる。

この村のかつての生業は紙漉きであった。どの家も川に下りていく石段があり、川辺で手足を水にひたしながら作業をしたという。家々はゆったりとした造りで、屋根は赤い石州瓦、壁は明るいオレンジの土壁でそのコントラストは周囲の山の緑に映え、あまりの美しさに宮本は感動している。

私はこれまで多くの村を見てきた。しかしこんなに美しく整った村を見たことがない。この村の人たちはいわゆる芸術家でも詩人でもない。しかし詩を知り、美意識を身につけて、この村を作り上げてきている。

下の写真は、学校に向かう坂道の登り口に設置された通学名札。子供の姿が見えないとき、まずはこの札を見て、帰ってきているのか、それともまだ学校にいるのかを確かめる。子供たちの安全を守る村人たちのこまかな配慮である。

佐々並から藤蔵へ



▲佐々並の宿 旧役場の前で道がカギ形にまがる (昭和44. 8. 18)



▲水あげ水車 大下 (昭和44. 8. 18)

萩から瀬戸内海の三田尻まで続くかつての参勤交代の道、それが萩往還である。萩を出て、明木を過ぎ二つ目の宿が佐々並。殿様もこの佐々並のお茶屋で一服するのが慣わしであった。写真(上)は当時のメインストリート。かつての宿場の面影を残し、宿場の特徴であった鍵型に曲がる道も昔のままだった。幕末の頃、多くの志士たちが宿泊したという古い宿も残っていた。

昭和四十四年の夏、宮本は佐々並の地に降り立ち、そこから佐々並川に沿って、阿武川との合流点である藤蔵まで歩いている。距離にすれば約十km、アップダウンの激しい山道をしかもこの真夏の時期に歩く、さすがの宮本も暑い日の下を歩くので疲れるとこぼしている。

暑い夏の盛りで、行き交う人もなく、人家や畑にも人の姿は見えない。従って話をきくことも出来ず、単調な山道歩きとなったようだ。

このような生活が決して時代おくれのものであるとは思わない。むしろそう思わせるような政治にゆがみがあるのではないか。過疎は起るべくして起ったところもある。しかし起るべからざるところにも起っている。経済効果をあげることだけが人間の生き方ではないはずであると、佐々並から藤蔵までの道があるいて考えさせられたのである。

昭和四十年代は、日本が高度経済成長に沸いた時期、効率化の名のもとに、多くの古き良き生活の知恵や技術が軽視され、隅に追いやられ始めていた。宮本はそのことを強く憂いた。

下の写真は、山中の天下地区で撮影された水あげ水車。田の下を流れる溝から田の上に用水を汲み上げる農耕用の水車で、かつては、中国地方の山地に多くあったという。

宮本常一 略譜



▲昭和36年9月・見島調査。漁船上で野帳とカメラを手にした宮本常一。(萩博物館蔵)

1907年 明治40 山口県周防大島の農家に生まれる。生家は善根宿でもあった。
 1924年 大正13 大阪通信講習所卒業、高麗橋郵便局に勤務。
 1929年 昭和4 大阪府立天王寺師範学校卒業、泉南郡の田尻尋常小学校に赴任。
 1930年 昭和5 肺結核により休職、療養中に投稿した研究論文が柳田国男の目に止まる。
 1932年 昭和7 北池田尋常高等小学校に復職。

1935年 昭和10 生涯の師となる洪沢敬三と出会う。
 1939年 昭和14 「アチック・ミュージアム」に入る。以後本格的な民俗調査に没頭。
 1940年 昭和15 東北オシラサマ調査
 1941年 昭和16 土佐源氏調査
 1945年 昭和20 大阪府嘱託農業技術指導員に就く。
 1950年 昭和25 対馬・杵岐離島調査
 1951年 昭和26 能登・時国家調査
 1952年 昭和27 五島列島調査、離島振興法の制定に尽力。
 1954年 昭和29 全国離島振興協議会の初代事務局長に就任。
 1956年 昭和31 愛知県名古屋村調査
 佐渡調査、佐渡の歴史的遺産による村おこしを提唱、その後の古民具博物館立ち上げを支援。
 「忘れられた日本人」(岩波書店)出版、一躍脚光を浴びる。
 1960年 昭和35 東洋大学より文学博士号授与。山口県見島調査
 1961年 昭和36 武蔵野美術大学教授に就任。長野県奈川・安曇調査
 1966年 昭和41 日本観光文化研究所(現・旅の文化研究所)の初代所長に就任。後進の育成にあたる。
 1967年 昭和42 雑誌「あるくみるきく」創刊
 「佐渡の國鬼太鼓座」結成に関わる。新潟県山古志村調査
 1974年 昭和49 私の日本地図(秋付)近出版。宮本常一著作集(宝島民俗誌、見島の漁村出版)
 1977年 昭和52 武蔵野美術大学定年退職。「周防環まわしの念」設立。
 1980年 昭和55 周防大島に「郷土大学」を設立。
 1981年 昭和56 胃がんのため東京都府中市にて死去、73歳。

TRC102078

萩を知ろう！萩を楽しもう！萩を伝えよう！

■シリーズ「萩ものがたり」既刊タイトル

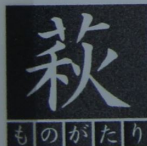
タイトル名	著者	定価
①萩の椿	吉松茂	600円
②高杉晋作100問100答	一坂太郎	500円
③萩開府—毛利輝元の決断—	北村知紀	600円
④萩まちじゅう博物館	西山徳明	600円
⑤松陰先生のことば—今に伝わる志—	萩市立明倫小学校 (監修)	500円
⑥密航留学生「長州ファイブ」を追って	宮地ゆう	600円
⑦萩と日露戦争	一坂太郎	500円
⑧萩の巨樹・古木	草野隆司	600円
⑨吉田松陰と現代	加藤周一	600円
⑩萩沖の魚たち (春・夏編)	中澤さかな/堀 成夫	600円
⑪萩の史碑	一坂太郎	500円
⑫山田顕義—法治国家への歩み	秋山香乃	600円
特別編 ますらをたちの旅【長州ファイブ物語】	一坂太郎	1300円
⑬川柳中興の祖—井上剣花坊	大庭政雄 (監修)	600円
⑭高島北海 HOKKAI 萩とナンシー	高樹のぶ子	600円
⑮桂小五郎	一坂太郎	500円
⑯萩沖の魚たち (秋・冬編)	中澤さかな/堀 成夫	600円

販売所／萩博物館・萩市観光協会・明屋書店・道の駅・市内のホテル旅館・萩市役所受付など
 ※郵送でのご購入は、萩ものがたり事務局まで電話・FAX・Eメールでお申込みください。

萩ものがたりは、定期購読ができます。

年会費2,000円にて、年間4タイトル(4・10月発行)を定期配本。

- * 定価割引の特典があり、確実にお手元に、送料は無料！
- お申し込み方法 ハガキ・FAXでの申込み 住所、氏名、電話番号をご記入ください。
電話・インターネットでの申込みもお受けします。
- 会費のお支払い方法 申込みと同時に郵便振替用紙をお届けします。
銀行からの口座引き落としもできます。



有限責任
 中間法人 萩ものがたり
 〒758-8555 山口県萩市大字江向510番地
 TEL 0838-25-3233 FAX 0838-26-5458
<http://www.city.hagi.yamaguchi.jp/portal/book/booklet.html>
 E-mail story@city.hagi.yamaguchi.jp

※丁本・乱丁本は発行所宛にお送り下さい。送料発行所負担にてお取り替えいたします。

刊行のことば

山口県萩市は、本州西端に位置し日本海に面します。江戸時代は毛利三十六万石の城下町として栄えました。幕末には吉田松陰をはじめ多くの逸材を輩出した明治維新胎動の地として知られています。

このようなことから全国に例をみない近世の都市遺産、明治維新関係史跡や史料、近代日本の礎を築いた多くの人物に加え、北長門海岸国定公園の自然美など「宝物」ともいべき資源に恵まれています。

しかしながら、明治維新は風化しつつあると言われるように、かつては萩に伝承されてきた物語などが消えつつあります。

毛利輝元が安芸の国(広島県西部)から萩の地に移封され、開府してから、平成十六年(二〇〇四)は四百年の節目となります。

そこでこれを機に、萩に残る厚みのある歴史文化・人物、豊かな自然、多様な行事や風物、民間伝承、伝統産業など、後世に語り継ぐべき萩のすべてをブックレット・シリーズ「萩ものがたり」として定期的に刊行し、後世に伝承するとともに、全国に向け発信することとしました。

読者の皆様、この小冊子を活用され、萩の素晴らしさを楽しみ、理解する一助となるよう願ってやみません。



【著者紹介】
 中澤さかな (本名・等)

一九五七年滋賀県生まれ。関西学院大学卒(水産地理学専攻)。同大学三年次より漁労民俗学を学ぶ。宮本常一の著作に出会う。一九八〇年(年刊)クルーに入社、勤続三十年で同社を早期選択定年退職し、二〇〇〇年四月、萩市に家族で移住。道の駅萩しまいと駅長。ブックレットシリーズ「萩ものがたり」のプロデュース。『サマー 編集者も兼ねる。論文に「紀州雑質崎漁民の生活誌」、著書として同シリーズより「萩沖の魚たち(春夏編)」「同(秋冬編)」など。

定価 600円 (本体571円+消費税29円)

生涯のうち約四千日を旅に過ごし、「歩く巨人」とも称された民俗学の巨星・宮本常一^{みやもと じょういち}。日本中の村や島々を歩き続け、その行程は約十六万^{キロ}、地球四周分に相当するという。昭和三十五年より民俗調査のために宮本は萩を訪れ、庶民の生活の様子を2千枚余の写真に収めている。このブックレットでは、その膨大な写真の中から代表的なカットを選び、宮本常一の眼差しを通して見た、当時の町の様子や人々の暮らしの模様を再現した。



萩市立萩図書館



110955648

82

8
萩
ものがたり

Vol 18

旅する民俗学者 宮本常一が見た萩

2008年4月1日 第1刷発行
著者 中澤さかな (萩ものがたり編集部)
発行者 野村典児
発行所 有限責任中間法人 萩ものがたり
印刷 有限会社マシヤマ印刷